

第 1680 回（6 月 4 日）

国際機関による食料需給見通し

坪 田 邦 夫

最近の国際穀物価格の高騰を見ると、レスター・ブラウンの「予言」が的中しつつあるようにも思える。そこでブラウンの予測とその対極にある世界銀行の予測を中心に、最近公表された世界の主要国際機関の食料需給見通しについて、簡単な比較検討を試みた。

ブラウンの予測は、今後世界の穀物需給は人口増大と飼料用消費の増大により急増するのに対し、生産は、農用地や技術、環境等の面で限界にぶつかるため需給が逼迫するとするものである。特に中国は、年間 2～3 億トンも不足する可能性があるという。しかし、氏の悲観的予測の根拠である、水産業からの類推、近年の穀物単収の伸びの鈍化、日韓の穀物作付け面積急減、近年の技術進歩の鈍化等の解釈は、誤解や一面的なところが多い。ブラウンの予測の意義は、その警告のメッセージにある。即ち、第 1 に過剰になった関係者に過度な楽観論を戒めた、第 2 に計量経済モデル万能の風潮に一石を投じた、第 3 に水産物需給を含めて考察する必要性を思い起こさせた、第 4 に最大の不確定要素が中国であることを再認識させた、第 5 に人口政策の重要性を訴えたことである。

ブラウンの対極にあるとされるのが、世界銀行のミッチェルほかによる楽観的な予測である。この予測は、穀物だけの予測であるが、世界の需要は相当に増加することは認めつつも、生産の拡大可能性が大きいため、結果的に穀物の実質価格は低下するとみる。温暖化や技術の停滞の影響もさほど心配していない。その特徴は、資源や生産者の長期的な食料供給対応力についての楽観と、市場の調整力に対する全幅の信頼である。以上のほか、IFPRI、OECDなども見通しを発表している。これらの見通しも、すくなくとも 2010 年ま

では、世界の穀物需給はタイトになることはなく、価格の高騰もないと見ている。これは、1) 予測期間が比較的短いこと、2) 生産拡大余力に対して楽観的なこと、3) モデルの性格上、価格を媒介にして収斂すること、等が理由である。

これらを比較すると、需給のうち、需要については、ブラウンも含めてその予測値にほとんど差がない。人口の増加と経済成長に伴う穀物需要の増大は自明だからである。また、旧計画経済圏の一人当たり穀物需要が当面減るとみることも同じである。差がでるのは、生産の見通しである。ブラウンは他機関の予測より、生産拡大の諸制約を重く見ている。しかし「農業生産技術の進歩の鈍化」、「土地資源の限界」、「灌漑開発の困難性」、「肥料効率の低下」、「地球的環境悪化」など議論を検討すると、常識的ではあるが、真理は双方のグループの間にあると考えるのが自然なようである。

人類の英知や市場の調整力に余りに信頼を置きすぎるのも楽観的すぎるし、さりとて「水産業のアナロジー」で、農畜産業が供給限界にすぐぶつかる考えるのも、極端すぎる。短期的には市場の調整力が働き、現在のような国際穀物相場の急騰を沈静化させようし、長期的には農業投資が促進されよう。ただそうした調整力や追加投資の効果が鈍化する傾向にあるのも事実であろう。ブラウンの警告は正しく受けとめ、今はおごなりにされている農業への研究投資や開発投資にもう少し力を入れるべきである。